

紫、青といった暗い色を好んでおり、前者は同じ北海道におりながら桃を多く好んでいる。また最も日本的と一応目してとり出した東京浅草の日本人女子と、東京在住のアメリカ人女子とを比べると、日本人が桃、紫を好むに對し、アメリカ人は橙、青を好んでいる。

以上、年令別、男女別、季節別、地域別、民族別の考察の結果は、すべて常識を確認、証明するものであったといえよう。例えば日本人女子が桃、紫を好み、アメリカ人が刺戟の強い色を好んでいるのも興味深い。アイヌ女子が暗い色を選ぶのもたやすく理解できる。また地域的にみて、東京ではやわらかい色が上位にあり、東京以北に茶が、以西に白が多いのもそれぞれうなづけそうな気がする。全体的に色調が北より西の方が明るかった。季節的には春はあわい色が好まれているといえるであろう。

わたくし達の調査で気づいたことは、地域や季節の影響が予想以上に大きく、また仔細には、幼稚園によって橙が多く好まれたとか黄が多かったというように、特色がみられたので(子ども同士互に模倣して選択しないように方法を講じてあったので、めいめい独立に色を選んだわけだが)色の好みについて環境的影響は思いの外大きい。身近には受持教師によって色の好みも影響されることが推測される。季節的影響についても、子ども自身の季節感によって自らふさわしい色を選ぶというより、おとなの季節感による色の好みも子どもにうつっているとみるべきように思う。アメリカ人の子どもが「ママがわたしに似合う色は青だといった」として青を最も好む色としたなど、おとなの与える環境を子どもが直ちにうけとっている端的な例であろう。それ故衣服や子ども部屋の色彩が子どもにも如何に大きな影響を与えるかがうかがわれる。

男子は日常、赤系統を女の色として退け、黒茶などを選ぶのを見

かけるがここにも教えられた色の好みが見られるように思う。しかしそれにも拘らず男子の色の好みも幅広く、女子がはるかにかたよっている。

一方本調査によって、子どもに好まれる色を与える際の参考資料が得られたと思う。

最後に本調査に御協力下さいました各幼稚園、保育園に對し厚く御礼を申し上げます。
(大会抄録52—56頁)

幼児向絵本に

あらわれた語いの調査

(第一報)

埼玉大学 野間郁夫
東京学芸大学付属幼稚園 高杉自子
東京・魚籃幼稚園 山田巖雄
国立国語研究所 村石昭三

一、調査目的 絵本は言語指導の有力な一つの方法を提供するものである。絵本を用いて言語指導が展開されるとき、その七五%の場合是指導の前または後において絵本の中の文章を教師が読んで聞かせており、時々読んで聞かせる場合を含めると九六%の場合には絵本の文章が読まれている。(昭和三五年年度保育大会発表)すなわち幼児に聞かせる標準的な話しことばとして、また話し合いの大きな話題を提供するものとして絵本の中の文章は重要な役割をもっている。

このような絵本の中でも月刊絵本の占める役割は大きい。幼稚園備付け絵本の七二%は月刊絵本であり、前記の指導に用いられるのはほとんど月刊絵本である。そこでこの月刊絵本の中の語いを調査

し、指導上の問題とあわせて考察する。

二、調査方法 今回の調査においては、もつとも多く購入、使用されている月刊絵本四種（昭和三四年度保育学会発表）の昭和三十五年四月号より一カ年分四八冊をとり上げた。その中のすべての語について、使用回数、使用範囲、品詞別を明らかにした。その際（一）固有名詞は除き（二）単語は基本の形について考え（三）補助動詞は動詞にいれ（四）擬声（態）語も副詞として扱い（五）また接頭語、接尾語について考えた。

三、調査結果

(1) 延単語総数

一種平均延単語数五、九六一・二五

一冊平均延単語数四九六・七五

ただし延単語総数中の接頭語、接尾語などによる重複を除けば延単語総数は二二、六七八である。

(2)

表1によるごとく絵本の種類によって一年間の使用延単語および語い実数において、著しい差がみられる。

しかし五回以上使用されている語についてはもつとも多い方の絵本でも、もつとも少ない方の一・三倍で大きな差はない。両者の著しい差は五回以上使われる語の使用頻度の多少と、使用四回以下の語数の多少から生ずる。これは絵本の選択および言語指導への使用に当って注意しなければならぬことである。

(3) 表2は総語数中五回以上使用された語を集計したものである。ただし使用範囲を考え、一冊だけに出ているものは除いた。しかしこれらの延語数が全延語数の約八六%を占めるところから全体の傾向を大体察し得るであろう。以下は主にこれについて考察を進める。

(4) 助詞、助動詞は延語数合計が全体の四八・七五%となり、話す

ことばの中で重要な位置を占めていることがわかる。とくに助詞の

表1 絵本種類別語数比較

	延語数	語い実数	延語数（頻度）		語い実数（頻度）	
			四以下	五以上	四以下	五以上
最 多	8,640	1,296	1,130	7,510	693	603
最 少	3,380	748	416	2,964	293	455

表2 多使用語 品詞別 (延語数 20,488=全延語数の約86%, 語い実数 686)

	延語数	延語数 %	小学校教科書※	語い実数			小学校教科書※	一語当り頻度
				語い実数	同右%	同右順位		
助 動 詞	7,080	34.56	35.86	40	5.83	4	1.69	170.0
	3,692	18.02	20.95	276	40.23	1	55.62	13.4
	2,939	14.34	17.34	141	20.56	2	22.94	20.9
	2,907	14.19	12.06	15	2.19	9	0.84	193.8
助 動 詞	667	3.26	1.86	72	10.50	3	3.74	9.3
	537	2.62	2.72	37	5.39	5	3.77	14.5
代 名 詞	484	2.36	2.11	16	2.33	8	1.07	30.3
	397	1.94	0.79	30	4.37	6	1.98	13.2
感 動 詞	215	1.05		18	2.63	7		1.9
	160	0.78	0.94	9	1.31	12	0.33	17.8
数 接 続 詞	146	0.71		11	1.60	10		13.3
	84	0.41	0.70	9	1.31	12	0.78	9.3
接 尾 語	752	3.67	3.15	10	1.46	11	1.56	75.2
	428	2.09	0.78	2	0.29	14	0.19	314.0

註 ※は大阪矢田小学校「基本語体系」（六月社発行）による

(5) 語い実数からみれば名詞、動詞で全体の約六一%を占め語いの比重は大きい。拡充の問題の焦点となる。

表3 助動詞機能別分類

機能別	語	延語数	同%
過去・完了	た	1,052	36.19
敬 讓	ま す	814	28.00
断 定	だ で す	304 270	19.74
打 消	な い ん (ぬ)	114 50	5.64
推量・意志	う よ う	106 43	5.13
受 身	ら れ る れ る	28 21	1.68
伝聞・様態	そう だ	29	1.00
希 望	た い	27	0.93
比 況	よ う だ み たい	22 12	1.17
使 役	せ る	15	0.52

(6) 小学校教科書との比較(表の註のものは小学校三年までの全教科書の調査によるもの)において絵本の特色を考えれば、接頭語、感動詞、副詞の問題が挙げられる。

(7) 全語い中の接頭語「お」の使用状況をみると、接頭語としては多使用語六八六語中「お」と「こ」だけであるが「こ」の使用は非常に少ない。「お」の使用で自然の事物、天体気象に関しても多く使われていることは絵本の特色である。自然の事物でも花、魚、猿、馬、山、池などに限られている。

(8) 表2において副詞の割合が小学校と比較して多いのは一には品詞分類の基準の違いにもよる。後述の擬声語などで小学校の分類では準名詞として分類されているものをわれわれは副詞の中にした。

副詞中がら、さらさら、びよんびよんなどの擬声語(擬態語)の多いことは絵本の特色の一つであり、これは幼児の事物の理解

表4 動物に関する名詞

順位	名 詞	数
1	うるみ	57
2	かみまん	47
3	おいか	39
4	おイ	32
5	クオ	27
6	ねぎ	27
7	ねぎ	26
8	き	21
9	つ	20
10	み	19
11	どう	18
12	う	17
13	い	16
14	り	13
15	し	13
16	た	11
17	ぬ	11
18	り	11
19	キ	10
20	ふ	9
21	カン	7
22	ガ	7
23	ル	6
24	の	5

表5 植物に関する名詞

順位	名 詞	数
1	き(木)	48
2	はな(花)	47
3	り	32
4	ん	29
5	く	19
6	り	15
7	め	14
8	き	14
9	か	14
10	み	12
11	ん	9
12	ほ	8
13	ぼ	8
14	く	7
15	さ	7
16	ら	7
17	ば	6
18	ん	6
19	み	5
20	り	5
21	も	5
22	え	6
23	た	5

をたすけ、ことばの感覚を育て、ことばへの興味をひくなどの効果を期待しているものと考えられる。

(9) 名詞は全体の二割を占め、特に動物に関するものは延語数七六〇語(約名詞の二〇%)になる。そして、その種類もけものに関するものが多く、そう、さる、おおかみなど表4に示された通りである。絵本の性格からいって、その絵柄と最も関係が深い点や、物語的な扱いで動物は描かれている場合に多い点、また性格を描き出している点などは特色と考えられるであろう。植物に関する語いなどをみても具体的な花の名前はたんぽぽ、麦だけで、あとは、木とか花とかという総称的な語である。また季節も、冬18、春16、夏5、の順である。これら考え合わせると、絵本のみによって、語い指導ができると考えては危険である。また絵本の中の語いも絵とことばと事実との関連において確認されるべきであろう。

(10) なおことばの選択の問題がある。たとえば前述の多使用語六八

六の中に「配達」があつて、からだ、橋、新聞、店などの、より身近なことがない。言語指導の上で、また広く幼児教育の上で、現在の絵本をどのように位置づけて使用するかについては教師の研究を要する問題である。また理解が困難と思われる語、たとえば「銀世界の広場におどる」とか「無法者」とかの語もみられる。

(1) 方言、俗語、幼児語、外来語の使用にも不用意な面がみられる。要するに絵本の現状は教師が各種絵本の特徴、傾向を正しく把握し、これを幼児教育の上に、言語指導の上に正しく位置づけ、足らざるを補つて使用することを必要としている。(大会抄録58—63頁)

幼児の生活環境と

読書レディネス(その二)

大阪商業大学附属幼稚園 土 山 汀

第一回の発表は普通家庭に育つた幼児達の読書に関する諸問題などについて調査し発表したのが、今回は生活状態をこととした幼児達二、三を取り上げ、その幼児達の読書生活はどのようであり、また普通家庭に育つた者との差はどのようであるかなどについて知る為本調査を行った。

一、調査対象、及びその読書生活

A 日本に住む韓国人、南鮮を中心として。

家庭では六四％が韓国語と日本語を半々に用い、日本語のみの家庭は三六％である。韓国語のみの家庭は全然無い。

文字は日本語の方が早く覚えている。韓国の文字は、幼稚園や学校に入ってから教えられるのが九五％位である。韓国語の絵本を全然見ないのでそれらも大いに関係する。

B 社会福祉施設の子どもは、施設に入つて来る年令がまちまちである事や、指導者が変わる事などで、一般家庭児のように観察は出来ないが全体的に見て少しおくられているようだ。絵本に対する興味も普通または少ないというのが多い。なお学校に行くまでに五十音と濁音合わせて半分位しか読めないのが多い事などを見ても、幼児が興味を持ってもそれをのばしてやれるだけの指導者の手のたらい事なども関係するのではなからうか。

C 身体不自由児擁護施設の子ども。病気の為読書力のおくれたと思ふ者は六〇

％、外で遊ばない為、絵本をよく見るので早いと思ふという者は二八％、関係無いは一二％である。全体に見るとやはりおくれるようだ。名前を読む方は、

大体の子どもが読めるが、書く方は表に示すように四十％ができない。これは、おくられている為に書けないのも多いが、手の不自由な為エンピツを持つことが出来ない子どももあるからである。

いかなる環境に住む子どもも、自分の身近にある絵本、カルタ、字つみ木などを通して自分の身近に感じる自分の名前の中の一字を中心として字を覚え初める。テレビによって字をよく覚えたという子どもも多くなつて来ているが、これはマスコミの影響であろう。

年令	韓国語	韓国の日本語	社会福祉	身体不自由	一般家庭児
満3.5	0%	0%	0%	0%	1%
4	0	3	0	0	7
4.5	4	10	0	0	14
5	6	12	0	0	21
5.5	8	20	15	4	31
6	12	23	35	8	14
6.5	34	12	25	12	12
7	20	10	20	16	0
半分位	3	0	5	20	0
書きな	2	0	0	40	0
無記入	11	10	0	0	0

名前が書けるようになった年令